

10月号の×切は11月1日(土)です

漢代・敦煌木簡隸書

木簡は墨で文字を書くために使われた短冊状の細長い木の板のことで、古くからごく一般に利用されていました。20世紀後半から中国全土で多数発見され、中でも敦煌ではこれまで2万点余りが発見されています。



鄭子方衛益壽史步昌周千

秋趙彌卿愛展世高辟兵(すべて姓名)

急就奇觚與衆異羅列諸物

名姓字分別部居不雜廁

用日約少誠快意勉力務之

必有意請道其章宋延年

書

卷

九

- ◆宮城野書人会練成会報告記(26頁)
- ◆宮城野書人会展／学生書道展報告記(27頁)
- ◆第76回毎日書道展特集(29頁)

木簡は、主に古代の東アジアで墨で文字を書くために使われた短冊状の細長い木の板のこと。木の板に文字を書くことは、文字の存在する文化圏では古くからごく一般に行われていた。紙が普及する後漢以前、有力な筆記素材は木(竹)か絹(帛書であった。帛書は高価であったため、広く用いられたのは木簡・竹簡である。紙の普及によりやがて木簡は廃れるが、完全に存在を消したわけではなく、荷札などには長く用いられた。竹片に書かれた竹簡と木簡を合わせて簡牘(かんごく)と呼ぶ。

木簡の特徴の一つは、削って書き直したり再利用したりすることができるという点である。そのため当時の文具には筆、墨、硯に加えて小刀が含まれていた。削り屑に習字した例もある。書き直しが容易ということは、同時に、改竄(かいざん)しやすいという弊害も生む。

【中国での木簡の出土】

1901年にニヤ遺跡(中国新疆ウイグル自治区ニヤ県の都市遺跡)で50枚、楼蘭で120枚余の晋代の木簡が発見(居延漢簡)されたのが木簡出土の先駆けとされる。数年後、敦煌で約900枚の漢代木簡が見つかる。1930年にはエチナ川(内モンゴル自治区を流れる河川)流域から一挙に1万点以上の大量の木簡(居延漢簡)が発見された。このときは木簡を横に並べて作った冊書が初めて見つかった。これら20世紀前半の木簡は、すべてヨーロッパ人の中央アジア探検隊が西北辺境で発見したものである。20世紀後半からは中国人が全国で多数発見するようになった。

敦煌ではこれまで2万点余が発見されている。地域を問わず木簡全体の発見数は100万点を超えるとされる。

【課題文字について】

課題は急就篇きゅうしゅうへんと呼ばれる、初学者に文字を教えるための教科書である。※急就章ともいう。34章にわけられており、内容は、姓氏、衣服、飲食、器物、音楽、身体等に分類され、二千以上の字に殆ど重複がなく、暗唱しやすいように一句は七字、四字、三字のいずれかより成る。課題は全て姓氏三字。

【木簡隸書の用筆と運筆法】

木簡は木簡隸書と木簡草書があり、更にそれぞれ出土数が膨大であり、当然筆者の数も未知数であるから、木簡の用筆・運筆法をひとおもいに語ることは出来ない。あくまでも、ここでは課題の急就篇の書き方と心掛けを記す。

①起筆の基本は藏鋒もしくは逆筆。穂先が左上に向く側筆・露鋒だと楷書っぽく見えるし、隸書は穂先が画の真ん中を通る中鋒(ちゅうほう)でないとな筆力が点画の真ん中に満ちないから藏鋒・逆筆がよい。

②送筆は筆鋒の弾力を生かしながら運ぶ。あくまでも穂先は画の真ん中を通して進む。

③収筆は払わずにゆっくり押し進め、最後は一旦止まってから静かに真上に離筆すると筆力が逃げない。

参考に木簡隸書風に「永」を書いてみます。



10月・12月号漢字規定部課題／準同人条幅臨書課題『敦煌木簡』

尾形 澄神

左は、木簡字典を片手に私の経験と勘とで文字の輪郭をなぞり、そのあと画中进行で塗りつぶした。様々な筆致が見られる敦煌出土の木簡の中から左記を選んだ理由は、この木簡の用筆が「曹全碑」の筆遣い学習への布石になること(左記の敦煌木簡と曹全碑は、横画収筆の「波磔(はたけ)」と言うより波のようにうねって見える線「波勢(はせい)」の用筆が近い。木簡隸書は何と言っても横画や払いの暢達さに躍動感、生命感がある。条幅に書く場合は二行でのびやかに運筆するのも心地がいい。勿論、左記以外の箇所を書いても結構です。ただ、武威(ふい)や居延(きえん)など、敦煌以外の木簡は課題違反になりますのでくれぐれもご注意ください。※書人会のホームページで私の臨書動画をご覧いただけます。



鄭子方衛益壽史步昌周千



【原帖】



秋趙孺卿爰展世高辟兵



【原帖】